



羽田クロノゲート



水盤に映える受付棟と物流施設

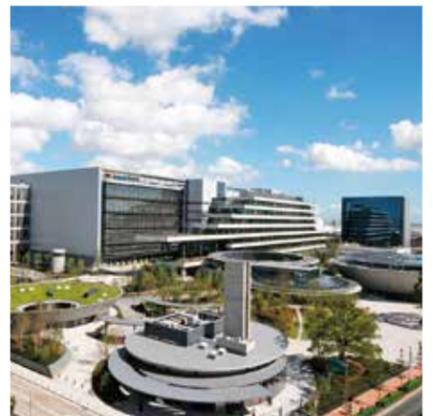
review

選評

「物流の革新を目指すスーパーターミナル」と称する、物流倉庫と事務管理部門、地域貢献施設からなる延床面積二〇〇、〇〇〇平方メートル近い規模に及ぶ巨大建築である。

現在のわれわれの利便性の高い生活は、こうした施設によって支えられ実現している。現代の社会を支える重要なインフラとして機能する建築であり、今までこうした施設にはあまり目が向けられてこなかったと言える。この巨大な建築をどのように実現し、維持していけるかがポイントとなる。羽田空港に隣接する敷地は、市街地とのエッジの工場跡地である。市街地の環八側から訪れると、里山をイメージしたという緑豊かなオープンスペースが迎えてくれる。この場所に古

くからある大木とともにカフェや体育館、託児所、エントランスホールなど地域の人々が利用できる施設が点在し、そこには、物流倉庫とは対照的な円形平面の建築の一群が緑に囲まれて建っている。斜めのコンクリートの壁がやや閉鎖的で強力だが、建物周囲に陰をつくりガラスの反射も抑えて、施設全体の印象を和らげている。メイン機能の物流トラックなどの出入り口も歩行者動線を巧みに避けていて全体としては気にならない。この緑地帯は、人間的なスケールを超えた物流倉庫と地域住民の暮らしを調停するゾーンと言え、都市的にも成功していると思う。従業員もこのゾーンにあるエントランスホールを経てやや冗長とも思われるような経路を経ていくと物流倉庫に隣接する事務空間にある巨大な吹き抜け空間が迎えてくれる。人間的なスケールを超えた建築の中において事務空間の大きな庇やテラス、屋外の風を取り入れる窓などそこで人間が働く環境であることを感じさせてくれる。また、物流倉庫内にもエコポイドと呼ぶ吹き抜けから光と風を取り入れるなど巨大な施設で働く人々の視点での工夫が考えられていて、パッシブ的に省エネルギーに効果を発揮している。施工的にはこのような巨大な空間を合理的に構築するための建設業としての経済性の追求、一九・五カ月という厳しい工期を実現するための施工上



敷地全景 物流施設と地域貢献施設



建築主より
Message from Client

ヤマトロジスティクス株式会社
取締役常務執行役員

森信介 Shinsuke Mori

地域と共生する「次世代物流ターミナル」

2019年、ヤマトグループは創業100周年を迎えます。竣工から6年を経て、羽田クロノゲートは国内外の多くのお客様に評価をいただき、まさにグループの基幹ターミナルと呼ぶに相応しい活躍を続けています。「クロノゲート」は、ヤマトグループが創業100周年のその先に向け、物流における時間軸の概念を変えようというコンセプトに基づいて、ギリシャ神話の時間を司る神「クロノス」と、国内外の物流の玄関口「ゲートウェイ」という単語を掛け合わせて名付けました。

設計チームとプロジェクトを進めていく中では、近隣地域との共生をどのように図っていくかが大きなテーマでした。出した答えは約20,000㎡の地域貢献ゾーン。今ではそのエリアにあるカフェ、緑地、体育館や保育所は、多くの方にご利用いただいております。今後も地域の方々に愛される次世代物流ターミナルを目指してまいります。



設計者より
Message from Architect

株式会社日建設
執行役員 設計部門 プリンシパル

五十君興 Ko Isogimi

物流施設の在りかたを変えた革新的な試み

今こそLogistics4.0として物流を装置産業化し価値を高める流れが定着してきましたが、設計を始めた2007年はドイツのハノーバーでIndustry4.0が宣言される2011年のずっと前であり、羽田クロノゲートで目指した目標や理念は今から考えると当時としてはかなり先鋭的なことであったといえます。環境親和、自動化、働き方の見直し、周辺地域への開放など、物流の未来を変える気概でクライアントとともに日々打ち合わせしていたことが懐かしく思い出されます。後年、歴史を振り返る機会があれば、羽田クロノゲートは物流施設の在り方を大きく変えるエポックとして位置付けられるでしょう。時代のその先を切り拓くヒントとチャンスを与えていただいた見識あるクライアントと、実現に向けてともに歩んだ施工者各位に感謝する次第です。



施工者より
Message from Builder

鹿島建設株式会社
東京建築支店 工事事務所 所長(当時)

石本健夫 Tatsuo Ishimoto

地域と共生する都市型物流施設をつくる

当プロジェクトは、約98,900㎡の敷地に用途、構造、外装の異なる物流倉庫棟、事務管理業務棟、地域貢献施設5棟を工期19.5ヵ月で、それぞれ特色のある構工法でつくり上げるというものでした。躯体、設備工事では、PCa部材のサイトPC、ランプウェイ腰壁PC、基礎、1階大梁、及び先端スラブのハーフPC、SRC柱・大梁の遠地借地地組み、大型空調機と機器架台を鉄骨・床板ユニットに組み込み揚重など、省力化工法を積極的に採用しました。地域貢献施設の体育館では、外壁局面PC板と屋根鉄骨を同時に迫り上げる工法が指定されており、PC面の精度確保、鉄骨自動迫り上げ時の制御方法は、建築主、設計監理者、施工者の担当者が一緒になって検討を行い、目標とした成果を収めたことで、チームとしてやり遂げたという達成感を共有できました。

着工直後の工事中断にも関わらず、所員と一緒に、要求品質を安全に、合理的に作るかを考え、実践においてさらに工夫を重ねていただいたすべての専門工学会社、職長、作業員の方々に感謝し、この賞を共有したいと思います。

巨大な施設が、ヤマトグループの物流拠点として稼働しながら、更に地域に溶け込み、この賞にふさわしい建物であり続けてほしいと願っております。



1. 外光の差し込むアトリウムラウンジ 2. 多彩に配置されるマテリアル・ハンドリング施設
3. 放射状フレームのフォーラム棟内装 4. 地域に真円の重なりで広がる施設

羽田クロノゲート 計画概要	
● 建築主	ヤマト運輸(株)
● 設計者	(株)日建設
● 施工者	鹿島建設(株)
● 所在地	東京都大田区 羽田旭町11-1
● 竣工日	2013年9月20日
● 敷地面積	98,872㎡
● 建築面積	45,165㎡
● 延床面積	197,575㎡
● 階数	地上9階、地下1階、塔屋1階
● 構造	プレキャスト・ プレストレストコンクリート造、 鉄骨造、木造(免震構造)

「選考委員」 西沢立衛・堀場弘・田中隆吉

この建築は、現代社会を支えるインフラとして企画され、その巨大な存在に様々な工夫で配慮しながら計画設計されていて、建設業としての高い技術により実現していた。総合的に考えて現代社会を象徴する質の高い建築であると評価できる。

の工夫など、適切に様々な技術を用いて、現代の建設業として品質の高い建築を実現している。竣工後五年を経て、緑地ゾーンなどをはじめ適切に管理され、夏祭りなどにも利用され地域にも溶け込んだ施設として認知されているようである。事業者により企画された建築が、適正なビジネスモデルとして社会での居場所を与えられて適切に維持管理されていることがわかる。